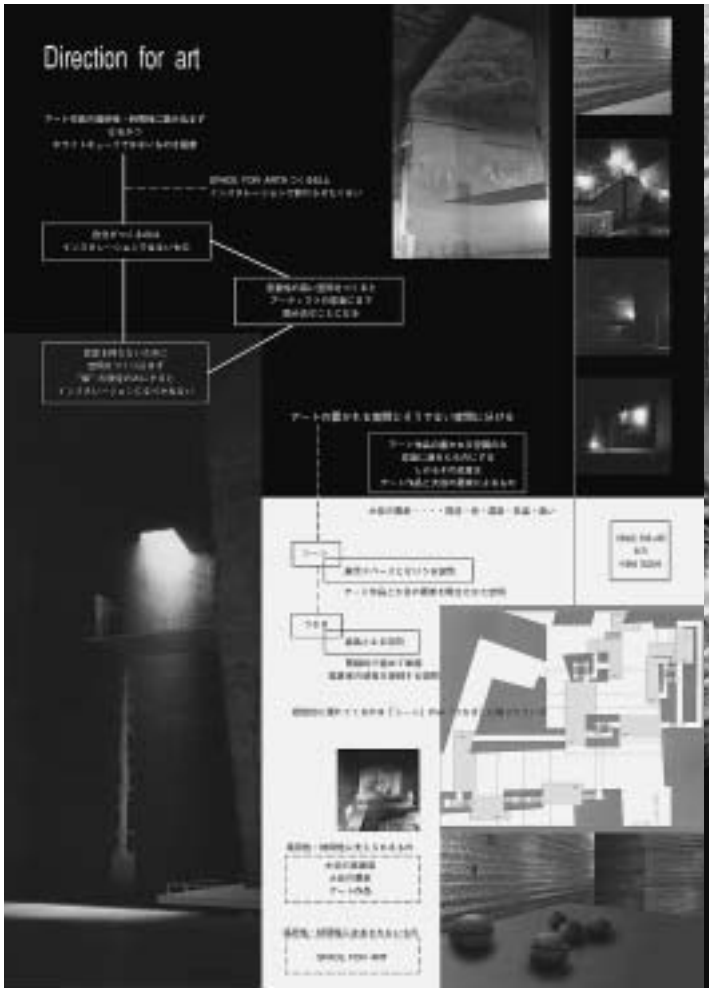
鈴木　寿枝



浜田　充

設計演習Ⅱ

課題
プログラムの変容と再構築

4年

担当：
高宮　真介

鈴木　寿枝
アートのための空間　それを演出する　舞台となる大谷石採掘場にある要素を利用し　アートが主役となる様々な「シーン」を生み出す　そしてそれぞれの「シーン」をより際立たせるために　「つなぎ」となる空間を閉鎖的で単調なものにする　そうすることで　「つなぎ」を抜けて「シーン」に出たとき　抑制されていた鑑賞者の感覚がいっきに解放され　アートの置かれた空間　「シーン」をよりつよく感じさせることができるようになる

浜田　充
アナタはナチス宣伝相ヨーセフ・ゲッベルスのような巧妙な広告・宣伝操作によって流行を植え付けられ、洗脳されている。...渋谷においてArtもまた、然り。渋谷の喧噪から離脱している公園の地下に下り、渋谷の光・音・空気をシャットアウトする。そこでは‘音なしの渋谷の映像’がたんたんとコマ送りで投影され、アナタは虚像の渋谷に包囲されながらスクリーンの光のチューブの中を歩き下り進む。「...！これがいつもの渋谷？？？」...アナタからゲッベルスは剥奪（アンインストール）され、真暗闇の中にアナタとArtは存在・対峙するのみである。

指導＝高宮　真介
〈プログラムの変容と再構築〉という共通テーマのもとに、〈Space for Arts〉という課題を出した。〈美術館〉という建築の概念を一度解体して再構築してほしいという意味と、コンテンポラリーアートのアートシーンが大きく変わってきていることに対する回答みたいなものも期待した。とくにホワイトキューブやインスタレーション以外で、アートワークに対応する空間の自律性を再構築の中で発見できればと思った。そんな期待に、十分とはいえなかったが応えてくれたのが両君の作品であった。鈴木君は大谷の採石場跡地を取りあげ、立体的に構成された展示のための大空間を、存在感のある大谷石のテクスチャーと、それらを浮き上がらせる天空採光などによって、非常にリリカルにまとめあげた。一方浜田君は、渋谷の宮下公園の先にある見捨てられたようなポケットパークの地下に、商業主義とポピュラーカルチャーが氾濫している渋谷の中心街と対峙するような、静寂のグロット一空間を創出した。それぞれが設定したアートワークも、空間の優位性に一歩譲った感があったが、それなりに適切なものだった。